

東教育財団だより

あけましておめでとう
今年もよろしく
お願い申し上げます



発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
2-2-11 堀筋本町
西尾ビル6階
電話 06 (6262) 7368
FAX 06 (6227) 8058
発行責任者 沼田 宏

平成三十一年度の 助成事業を 募集します

東教育財団では、中央区内の学校教育及び社会教育の育成、並びに、地域文化の振興に寄与するため、学校教育活動、社会教育・生涯学習活動、並びに、地域文化・まちづくり活動に助成をおこなっています。

平成三十一年度の助成事業は、
二月十一日(火)から募集を開始し、二月二十八日(木)に締め切ります。

ご応募をお待ちしています。

助成対象事業

① 学校教育事業助成

中央区内の学校教育の充実・発展に寄与し、且つ、当該校の独自性や特色を持つ事業

〈参考事例〉

- 地域の歴史、伝統、文化、産業等に関する調査・学習事業
- 右記の調査・学習によって作成した冊子等の発行事業
- 外国につながるのがある児童生徒への日本語等指導事業
- 姉妹校交流(多文化交流・共生)事業

- 伝統芸能(文楽、能等)鑑賞、学習、発表事業
- 校内緑化等自然環境整備事業
- クラブ活動に必要な用具・資材の購入・貸与事業
- クラブ活動の地域交流事業(例:吹奏楽部が開催する地域コンサート)
- クラブ活動等における全国大会等への参加事業
- 学校周年記念事業(十周年を単位とする周年事業に限る)



「学校教育事業助成説明会」風景

② 社会教育・生涯学習事業助成

中央区内の社会教育や生涯学習の充実・発展に寄与する事業



「社会教育・生涯学習事業助成説明会」風景

③ 地域文化・まちづくり事業助成

中央区内の地域文化や東地区五地域のまちづくりの振興に寄与する事業

助成対象団体

- ① 学校教育事業助成
中央区内に所在する公立の幼稚園、小学校及び中学校
- ② 社会教育・生涯学習事業助成
社会教育・生涯学習の活動を行う社会教育団体及び生涯学習団体

③ 地域文化・まちづくり事業助成
地域文化・まちづくり活動を行う
団体



「地域文化・まちづくり事業助成説明会」風景

助成限度額

平成二九年六月二三日、第五一回共同発行地方債(額面金額五億円利率一・九〇)が満期償還となり、超低金利政策の影響を受けて、平成二九年度の運用収益が前年度比で約六四〇万円の減、平成三〇年度も前年度比で三一〇万円の減となり、両年度とも助成額を見直さ(減額せ)ざるをえなかった。

第三三二回府公募公債(額面金額二億円利率一・五八)が来年度の

十一月二七日に満期償還となるが、当該債券の収益金は償還日までに年間収益が確保できるので、来年度の助成基準は、平成三〇年度と同一とする。

助成事業の紹介

平成三〇年度に助成した事業で、既に実施報告書を提出していたものを一部紹介します。

「地域文化事業助成」

○ せんば鎮守の社
音楽祭・芸術祭

開催十三年目を迎え、船場地域はもとより市内外の知名度も高まり、今やすっかり秋の恒例イベントとして定着した「せんば鎮守の社音楽祭・芸術祭」が十月六日(土)に坐摩神社境内・大阪府神社庁会館で開催された。例年は神社の野外ステージで行われてきたが、今回は台風接近の影響で屋内公演となった。

昼の部の「音楽祭」では、地元

の十三の音楽団体や文化団体による合唱、器楽演奏、舞踏、詩吟等また、若手オペラ歌手との競演も行われ、芸術の香り高いコンサートが開催された。

夜の部の「芸術祭」では、日本一流のバレエ団(法村・友井バレエ団)とオペラ歌手による「ドン・ジョヴァンニ」が上演された。

(助成額 音楽祭一五万円
芸術祭一〇万円)



「出演者全員による合唱」

○ 浪華の輪 夏まつり

浪華連合振興町会では、八月三

一日、浪華地域の商店・会社・事務所・地域住民らがNTTの船場ビル一四階に集い、「浪華の輪 夏まつり」が開催され、浪華の輪が大きな輪となり、町の活性化につながるコミュニケーションの場となった。

(助成額 七万円)



○ 第六二回 大阪薪能

大阪薪能委員会では、八月十一・十二の両日の夜、昭和三十二年から毎夏開催されている大阪薪



能を生國魂神社境内特設能舞台で上演し、在阪能楽師の技能の継承、並びに、大阪の伝統芸能を経済面で支えるタニマチ文化の継承、さらには、格調高い能楽の世界を大阪市民はもとより外国の人々も觀賞できる場を提供した。

また、平成二六年から一日目の昼間の空き時間を利用して、能楽を習う小中高生や大学生に日頃の稽古の成果を披露する機会を設けている。

(助成額 一五万円)

「地域まちづくり事業助成」

○ 愛日・集英社協交流事業



「神宗さんによる『お出汁』勉強会」風景

集英校下社会福祉協議会では、開平地域住民を約百名集め、十一月十日(土)、船場の名店「神宗」で『お出汁』の勉強会とふれあい食事会を開催し、その後、集英地域のふれあい茶道事業「炬開き」の茶席を設け、愛日地域の住民も一緒に体験した。

この事業により、集英・愛日両地域住民の親睦と連帯感が高められるとともに、開平校下世代の人材育成が図られた。

(助成額 一五万円)

○ 南大江健康ウォーク

南大江地域活動協議会では、第六回南大江健康ウォークを五月十二日(日)に開催し、総勢九八名の南大江地域の住民が京都府南丹波市美山の「かやぶきの里」を散策し、歴史を学ぶとともに、心身のリフレッシュをはかった。

また、八つ橋工場の見学や大石酒造の酒蔵見学などの社会見学も行った。

(助成額 一五万円)



○ たまづくり盆踊り大会



玉造地域では、長年にわたり毎年八月に盆踊り大会を開催しており、今年も第三十四回目となる同大会が八月四日(土)・五日(日)の両日、玉造小学校の運動場で開催された。

初日にはプロによる音頭・二日目にはCD伴奏による参加者の盆踊りが披露され、また、「おたのしみ抽選会」や模擬店も開かれた。

地域住民の親睦と世代間の交流が図られ、地域コミュニティの育成の場となった。

(助成金 二〇万円)

大阪の町人魂

粹 — 「いき」と「すい」

「粹」の訓読みは『いき』であり、音読みは『すい』であるが、江戸では『いき』と読み、上方では『すい』と読んだともいわれる。

では、『いき』と『すい』はどっち違うのか。「広辞苑」と「大阪ことば事典」（牧村史陽編）をみた。

広辞苑

いき（粹）（意気）から転じた語

① 気持や身なりのさつぱりとあかぬけしていて、しかも色気をもっていること。② 人情の表裏に通じ、特に遊里・遊興に関して精通していること。また、遊里・遊興のこと。

すい（粹）① すぐれたもの。②

人情に通じ、ものわかりのよいこと。特に、花柳界または芸人社会などの事情に通じて、举止行動、自らその道にかなうこと。また、その人。いき。

大阪ことば事典

（「イキ」の項はない。）

スイ（粹）意気なこと。世の中の酸いも甘いもよく経験して、人間生活の表裏に通じ事物に巧者なことをいう。ことに、遊里・遊興に関する事情によく通達し、洒落で明朗であること。

江戸郷土史家の杉浦日向子氏によれば、江戸の「いき」は「息」に通じ、上方の「すい」は「吸う」に通ずる。江戸の「息」は吐く息で、「棄てる」「こそぎ落とす」美学を表す。これに対し、上方の「吸う」は「吸う息」で、何事も自分の方に引っ張り込み、それを糧として生きる「吸収」の姿勢を表すのだという。

「いき」を粹と表記することが多いが、これは明治になってからのことで、上方の美意識である「粹（すい）」とは区別しなければならぬ。江戸の美意識である「いき」は意

気」で、江戸深川の芸者（辰巳芸者）について言ったのはじまりとされる。身なりや振る舞いが洗練されていて、かっこよいと感ぜられること。また、人情に通じていること、遊び方を知っていることなどの意

味も含むとされる。つまり、江戸の遊郭の遊女たちの心意気・負けん気を表す言葉であって、江戸の「いき」には、「云法」「いなせ」といった言葉に表される、威勢のよさが示されていたのである。

杉浦氏が指摘するように、江戸の「いき」は吐く息に通じ、不要なもののため込まず、サッパリ・スッキリとそぎ落とす、引き算の美である。江戸の「いき」の心を持った男女の間では、その緊張関係を突き放さず突き詰めなかったから、心中事件が起こらなかったのである。



上方の「粹（すい）」は、純粹の「粹」だといわれる。近松門左衛門の心中物に表される命がけの恋、上方の絢爛豪華な着物に見られる装飾などは、物事をトコトン突き詰めるという意味での「純粹さ」がある。これが上方流の「すい」である。

上方の「すい」は、吸う息に通じ、何でも取り入れ、蓄積していく足し算の美である。着こなしも身のこなしも優雅にはんやりやるのが「すい」である。

『守貞謾稿』「喜田川守貞が江戸時代後期の三都（江戸・京都・大坂）の事物・風俗を説明した類書（百科事典）」には、「京阪は男女とも艶麗優美を専らにし、かねて粹を欲す。江戸は意気を専らとして美を次として、風姿自づから異なり。これを花に比するに艶麗は牡丹なり。優美は桜花なり。粹と意気は梅なり。しかも京阪の粹は紅梅にして、江戸の意気は白梅に比して可ならん。」と書かれている。

ところで、粹（すい）の反対は無粹（ぶすい）だが、粹（いき）の反対は何か。それは「野暮（やぼ）」である。それじゃ「野暮な奴」とはどんな奴？それは「粹（いき）がる奴」である。だから、生粹の大阪人は「粹（いき）がらない」と肝に銘じるものの、「物事をトコトン突き詰める『純粹さ』」は、「野暮」に転じること

もあると自戒する。

（槇野 勝・記）